

指導資料

鹿児島県総合教育センター
令和4年4月発行

複式教育 第61号

対象
校種

小学校 中学校
義務教育学校



予測困難な時代を生きる子供たちを育てる複式学習指導Ⅱ —奄美市立宇宿小学校の実践を通して—

予測困難な時代において様々な変化に積極的に向き合っていく子供たちを育成するためには、子供たちが主体的に学ぶ仕組みを授業に取り入れていくことが重要である。複式学級における自ら学び自ら考えるガイド学習への転換を図っている学習指導について、本センターの研究提携校である奄美市立宇宿小学校の実践を通して紹介する。

1 はじめに

指導資料「複式教育第60号（通巻第2056号）」（令和2年10月発行、右二次元バーコード参照）では、副題を「自ら学び自ら考えるガイド学習への転換」とし、今求められている子供たち自身による主体的な学びと、子供一人一人のための深い学びの実現を目指した複式学級における学習指導の基本的な考え方について述べた。本資料では、奄美市立宇宿小学校の実践を通して、その実際について述べていく。



2 「学びに向かう力」を涵養する四つの視点について

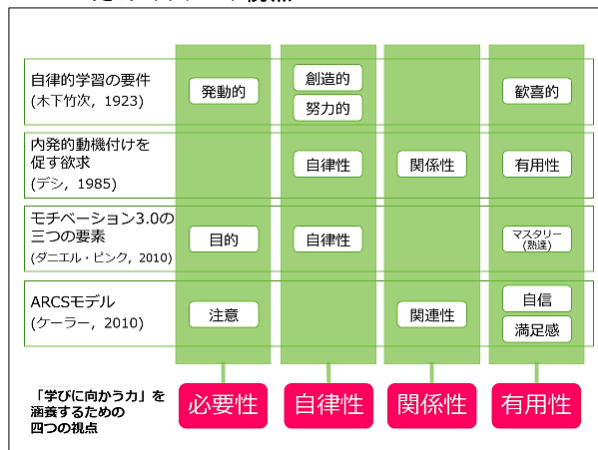
宇宿小学校では、本センターが令和元・2年度に調査研究した「未来の創り手に求められる資質・能力を育成する授業に関する研究Ⅱ～学びの価値を見いだす授業デザイン～」（詳しくは、指導資料「学習指導第1号（通巻第2104号）」右二次元バーコード参照）を土台にして、複式学級における学習指導について研究をしている。



「学びに向かう力」を涵養

するための四つの視点（以下、四つの視点）とは、内発的動機付けを起点とした授業改善のための視点である。子供たちの「学びに向かう力」を涵養する、つまり学習意欲の向上を促すためには学びに対するモチベーション（動機付け）を一層高める必要がある。動機付けには外発的動機付けと内発的動機付けがあり、後者による学習は知的好奇心を満たしやすいということが広く知られており、その心的要因やそれを意識した指導方法等についてこれまで様々な研究がなされている。これらを参考に資料1のように、授業改善の視点を「必要性」、「自律性」、「関係性」、「有用性」の四つの視点に整理した。その視点で見直し

資料1 先行研究と「学びに向かう力」を涵養するための四つの視点



た手立てを講じれば、子供が「学びに向かう力」を涵養することにつながると考える。言うまでもなく、この考え方は自ら学び自ら考える子供の育成を目指す複式学級における学習指導においても当てはまる。

3 宇宿小学校の実践

(1) 基本的な考え方

宇宿小学校では、本センターの四つの視点の捉え方（資料2）を基に、教師の手立ての考え方を次のように整理している。

資料2 本センターの四つの視点の捉え方

必要性 「~のためにしている。」 「~する必要がある。」 学習に動機を与え、必然をもたせる視点	自律性 「自分で~している。」 学習内容・方法を自分の意志で決められる視点
関係性 「~が参考になる。」 知識及び技能同士を結び付け、自分の考えを広げたり深めたりする視点	有用性 「なるほど~なのか。」 「~できた。」 学習に意味を見いだし、自分の資質・能力に自信がもてる視点

必要性

子供主体で学習を進める複式学級だからこそ、しっかりとした学ぶ動機を与えることで、より主体的な学習が実現できるようにしたい。

そこで、「うまくいかない」、「なぜだろう」というこれまでの生活経験や既習事項では解決できないような課題設定を行ったり、複式学級の特性を生かして、両学年共通の課題設定を行ったりして、「挑戦したい」、「解決する必要がある」などの学習に対する必要感や意欲がもてるようにした。

自律性

子供たち自身で学習する間接指導が多い複式学級での学習においては、その問題解決に適した内容や方法について、子供一人一人が自分事として捉

え、自分で選択・決定できるようにしたい。

そこで、関連する既習事項をいつでも確認できるように教室掲示や ICT 環境を整備したり、具体物を操作できるヒントコーナーなどを設けたりすることで、自ら学び自ら考える学習を促すようにした。

関係性

話合いの場面では、これまで培ってきた話合い活動の仕方を土台に、徐々に話合いの話型から離れ、子供の発言や自然なつぶやきで交流できるようにすることで、子供一人一人が主体的に考えを広げたり深めたりさせたい。

そこで、ホワイトボードやタブレット型端末を活用して可視化されたそれぞれの考えから、大事な考え方や働かせた教科等の見方・考え方などから共通点を見いだし、まとめにつなげることができるようにした。

有用性

子供たちは自分たちで学習のまとめや振り返りを行うことで、学びを通して獲得した資質・能力や学び方などを自分のものとし、次の学びに生かしてほしい。

そこで、学びを通じた自己の変容が分かるような振り返りができるようにした。また、両学年ともに、学習内容を領域や単元で揃えることで、学習内容の系統性をより捉えられる振り返りができるようにした。

さらに、宇宿小学校では、資料3のように、これら四つの視点を1単位時間の学習過程に当てはめて考えている。このように考えることで、子供たちが四つの視点を感じられる手立てを講じやすくなる。

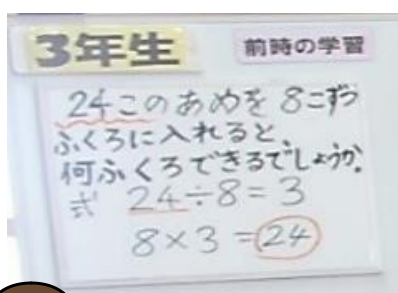
資料3 四つの視点と学習過程の関係

過程	主な学習活動	四つの視点に基づいた具体的な手立て
つかむ 見通す	1 前時の復習をする。	<div style="border: 2px solid green; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> 必要性 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 日常生活と関連させたり、知的好奇心を満たしたりする課題設定 ○ Which型による課題提示 ○ 異学年共通の課題設定 など <div style="border: 2px solid blue; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> 自律性 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 既習事項を想起させたり、関連付けたりする場の設定 ○ 1人1台のタブレット端末の効果的な活用 ○ 自己選択・自己決定する場の設定 など <div style="border: 2px solid orange; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> 関係性 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 考えの可視化・類型化による話合いの焦点化 ○ 異学年の考えを参考にしたり、交流したりする場の設定 ○ 柔軟に支援に入る個別対応 など <div style="border: 2px solid purple; border-radius: 50%; padding: 10px; text-align: center;"> 有用性 </div> <ul style="list-style-type: none"> ○ 達成感・成就感を意識した適用問題設定 ○ 見方・考え方を意識して自己の変容を捉える振り返り ○ 両学年の学びを交流できる場の設定 など
	2 学習問題を捉える。	
	3 めあてを立てる。	
	4 見通しをもつ。	
調べる 練り上げる	5 自力解決を図る。	
	6 考えを交流する。	
まとめる 振り返る	7 まとめをする。	
	8 練習問題をやる。	
	9 振り返りをやる。	

(2) 子供が必要性を感じられる手立て例

<第3学年 あまりのあるわり算>

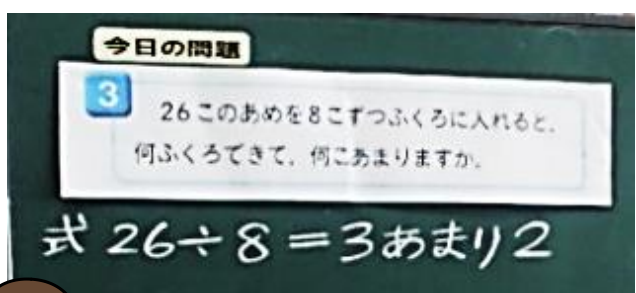
既習事項と本時の学習問題との違いを明確に捉えさせることで、子供が「どうするのかな。」「学習したことを基に考えればできそうかも。」と感じられるような場面を設定した。



3年生 前時の学習


24このあめを8こずつふくろに入れると、何ふくろできるでしょうか。
式 $24 \div 8 = 3$
 $8 \times 3 = 24$

➔




今日の問題

3 26このあめを8こずつふくろに入れると、何ふくろできて、何こあまりますか。
式 $26 \div 8 = 3$ あまり2



8×3をすれば確かめられるよ。




あまりの2はどうするのかな。確かめ方はどのようにすればいいのかな。


(3) 子供が自律性を感じられる手立て例

<第4学年 1けたでわるわり算>


学習方法、教具等を自分で選択・決定できる場を設定することで、主体的に問題解決に取り組めるようにした。



筆算と図を使って



ブロックを使って



10のたばで

(4) 子供が関係性を感じられる手立て例

<第6学年 分数のわり算>

数、式、図、表、グラフなどを活用して数学的に表現したそれぞれの考えを、数学的な見方・考え方で類型化し可視化することで、共通点を捉えられるようにした。



タブレット型端末を使って
今みんなの考えを
すぐに比べやすいね。



小黒板を黒板に提示して
書き込みもしながら話し
合もできるね。

(5) 子供が有用性を感じられる手立て例

<第5学年 小数のわり算, 第6学年 分数のわり算>

異学年間の交流では学習の振り返りを両学年同時に行うことで、6年生の子供たちは既習内容と関連付け、5年生の子供たちは今後の学習の見通しをもつことにつながった。その結果、学習内容や数学的な見方・考え方の系統性が捉えられるようになった。



6年生の「分数」では、数直線と面積の図
が一つになっているよ。やってみないな。

5年生の様子

比較



「整数に直す」という点では、5年生の
「小数」の学習と同じ考え方だね。

6年生の様子

4 おわりに

本稿で述べてきた考え方は、今回改訂された学習指導要領が示す授業改善の視点の一つである「主体的な学び」にほかならない。したがって、複式学級における指導だけでなく、単式学級の指導にも十分生かせることであるし、生かさなくてはならないことである。本稿の考え方、宇宿小学校が先行的に実施している学習活動を参考に授業改善に生かしてほしい。

—主な参考文献等—

- 文部科学省「小学校学習指導要領解説」総則編 2017
- 中央教育審議会『『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）』2021
- 鹿児島県総合教育センター「研究紀要 125号『未来の創り手に求められる資質・能力を育成する授業に関する研究Ⅱ—学びの価値を見いだす授業デザイン—』』2020
- 奄美市立宇宿小学校「研究紀要『自ら学び自ら考える子供の育成～教科等を学ぶ価値が実感できる複式学級における学習指導を通して～』』2021
- 鹿児島県総合教育センター「指導資料 複式教育 第60号」2020
- 鹿児島県総合教育センター「指導資料 学習指導 第1号」2021

(教科教育研修課 石川 雅仁)